

6. 特定植物群落の補足調査

6.1 調査目的

特定植物群落は我が国の重要な自然資源であり、震災による影響を的確に把握し、今後に備える必要がある。このため、平成 25 年度業務では空中写真判読のみで現地調査が実施できていない福島県浪江町に存在する特定植物群落（3 件：表 5.1、図 5.1）について、現状をより詳細に把握することを目的として現況調査を行った。

表 6.1 平成 27 年度 特定植物群落調査対象

番号	H26ID*1	対照番号*2	特定植物群落 名称	位置*3	面積 (ha) *4
①	69	福島県 05	しおびて 塩浸のアカマツ林	福島県双葉郡浪江町（櫛平国有林地内）	3.4
②	71	福島県 06	一の宮のヒメコマツ林	福島県双葉郡浪江町（一の宮の佐々木俊一先生譜碑付近）	9.0
③	72	福島県 07	やきじく 焼築のケヤキ林	福島県双葉郡浪江町（浪江営林署焼築事業所付近）	0.3

*1：平成 26 年度報告書（調査対象群落 ID）より、*2：第 2 回・第 3 回・第 5 回特定植物群落調査における福島県対照番号

*3：括弧内は第 5 回特定植物群落調査（追跡調査票）に記載されている地名、*4：第 5 回特定植物群落調査結果（追跡調査票）より

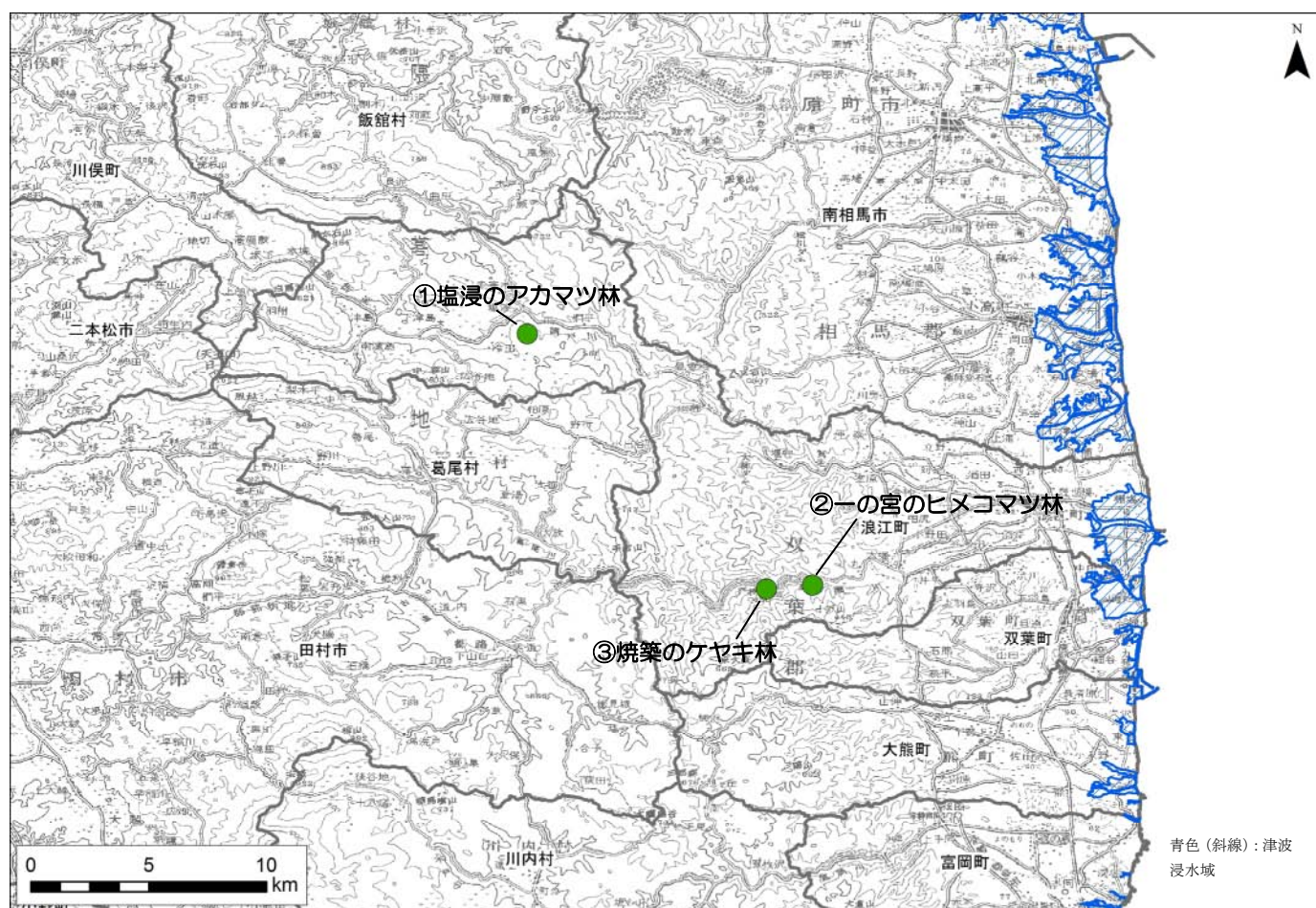


図 6.1 平成 27 年度特定植物群落調査対象位置

6.2 調査方法

調査対象群落について、特定植物群落に関わる過年度調査資料（第2回/第3回/第5回特定植物群落調査票、群落位置図など）をもとに、平成27年秋季（11月16～17日）に現況調査を実施した（表6.2、図6.2）。

表 6.2 特定植物群落の現況調査概要

項目	内容
追跡調査 (追跡調査票記入)	第5回自然環境保全基礎調査（特定植物群落調査）の追跡調査実施要領にもとづき「特定植物群落調査票（追跡調査）（図3.1左）」に調査対象群落の現況および過年度調査結果からの変化状況を記録した。
現地写真撮影	調査対象群落の外観や群落構造の概要がわかるように現地写真撮影を行った。
群落位置の確認	調査対象群落の過年度位置（指定範囲）が現況と異なっている場合は、地形図上に変更範囲を記録した。

<別紙1>

特定植物群落調査票 (追跡調査)									
03 取扱				(1) 調査年度 1985		(2) 都道府県			
(3) 対照番号	(4) 地図番号	(5) 1/5 万地形図	(6) 件 名			(7) 選定基準			
(8) 位 置		(9) 所 在 市 町 村		00 標 高		01 面 積			
		市 町 村		(m)		(ha)			
03 相観区分		04 立地区分							
(7) 変 化 状 況 及 び 原 因 (裏面参照)	(1)	1 面積、群落構成とも著しい変化なし							
	2	面積に著しい変化あり(その面積+-約 ha)							
	3	群落構成に著しい変化あり							
	4	個体数(個体群選定の場合)に著しい変化あり							
	5	群落又は個体群の消滅							
(2)		原因(番号に丸)							
		1. 人の立入 2. 盗 採 3. 農林業開発 4. 道路開発 5. 観光開発 6. 水辺の開発 7. その他の開発 8. 周辺の開発 9. 植物の侵入 10. 虫害・菌害 11. 動物の侵入 12. 汚染物質の侵入 13. ゴミの投棄 14. 自然災害 15. そ の 他							
(3) 変化の具体的な状況及び原因の具体的な内容(上記1) 2～5に該当する場合に記入)									
(4) 存続・削除に関する意見 (番号に丸)									
1 特定植物群落として存続 2 特定植物群落から削除									
(7) 保 護 の 現 状 及 び イ ン パ ク ト の 状 況 (裏面参照)	(1) 保護制度の種類・名称								
	(2) 指定状況(番号に丸)								
	1 継 続 2 新 規 3 変 更 4 解 除								
	(3) 指定の年月(記入)								
	昭和 年 月 昭和 年 月 昭和 年 月								
(4) 旧指定名称(記入)									
(5) インパクトの種類(番号に丸)									
0. 特になし 1. 人の立入 2. 盗 採 3. 農林業開発 4. 道路開発 5. 観光開発 6. 水辺の開発 7. その他の開発 8. 周辺の開発 9. 植物の侵入 10. 虫害・菌害 11. 動物の侵入 12. 汚染物質の侵入 13. ゴミの投棄 14. 自然災害 15. そ の 他									
(6) 上記インパクトの具体的な内容及び補足事項									
(7) 特記事項									
(7) 調査方法等(番号に丸)									
1 現 地 調 査 2 聞 き と り 聞 き と り 先 3 文 献 調 査									
文 献 番 号 著 者 名 発 行 年									
調査者所属					調査者氏名				

図 6.2 特定植物群落追跡調査票（フォーム）

出典：第3回基礎調査特定植物群落調査報告書より

6.3 調査結果

調査対象群落 3 件の追跡調査票、現地写真および位置図（群落範囲、撮影位置）を次頁以降に、現況調査結果の概要を表 6.3 に示す。

平成 27 年度調査対象群落 3 件はいずれも福島県双葉郡浪江町の津波浸水域外に位置するため、東日本大震災の津波などによる直接的な影響はみられなかった。「塩浸（しおびて）のアカマツ林」および「一の宮のヒメコマツ林」では、一部の個体に枯死または葉の変色がみられたが、群落全体としては、第 5 回調査時（1997 年度）と比較して、面積、群落構成ともに著しい変化はないと判断した。「焼築（やけじく）のケヤキ林」は、当該群落へのアプローチ途中に立入禁止のゲートがあり現地調査を実施できなかったが、過去の画像判読では人為改変はみられなかった。

表 6.3 特定植物群落の現況調査結果概要

特定植物群落 名称	調査結果概要
① 塩浸 ^{しおびて} のアカマツ林 (ID69/福島県 05)	・ 現地確認および過去の画像判読の結果から、当該群落は地震による直接的な影響はみられず、一部のアカマツの変色または枯死した個体が散見されたが、第 5 回調査時と比較して、面積、群落構成ともに著しい変化ないと判断した。 ・ 周辺部はスギまたは落葉広葉樹と混生するため、特定植物群落の範囲は国有林の林班図などを参考に見直しを行うことが望ましい（指定時の位置情報はポイント）。 ・ 帰還困難区域に指定され、立入りが制限されているため、林道は荒れておりアカマツの実生や空地雑草が繁茂していた。
② 一の宮のヒメコマツ林 (ID71/福島県 06)	・ 現地確認および過去の画像判読の結果から、当該群落は地震などによる直接的な影響はみられず、第 5 回調査時と比較して、面積、群落構成ともに著しい変化はないと判断した。 ・ 斜面上部付近のアカマツの一部が枯死している他、ヒメコマツの一部も黄色く変色していたが詳しい原因は不明である。 ・ 北側斜面（高瀬川左岸）にもヒメコマツが分布していることから、当該群落の広がりには留意する必要がある。
③ 焼築 ^{やけじく} のケヤキ林 (ID72/福島県 07)	・ 現地調査では、私有地および立入禁止のゲートが複数あり、焼築の集落へたどり着くことができなかった。 ・ 1970 年代オルソ画像や無償公開されている直近の画像を判読した結果、特に人為的な改変はみられなかったことから、当該群落は地震による直接的な影響はみられず、第 5 回調査時と比較して、面積、群落構成ともに著しい変化はないものと考えられる。

【①塩浸のアカマツ林】

平成27年度東北地方太平洋沿岸地域植生・海域等調査業務

69-福 5

県／緯度順ID	69
平成25年度ID	

津波影響調査票	—
植生調査票	—
現地写真	○
範囲の変更	—

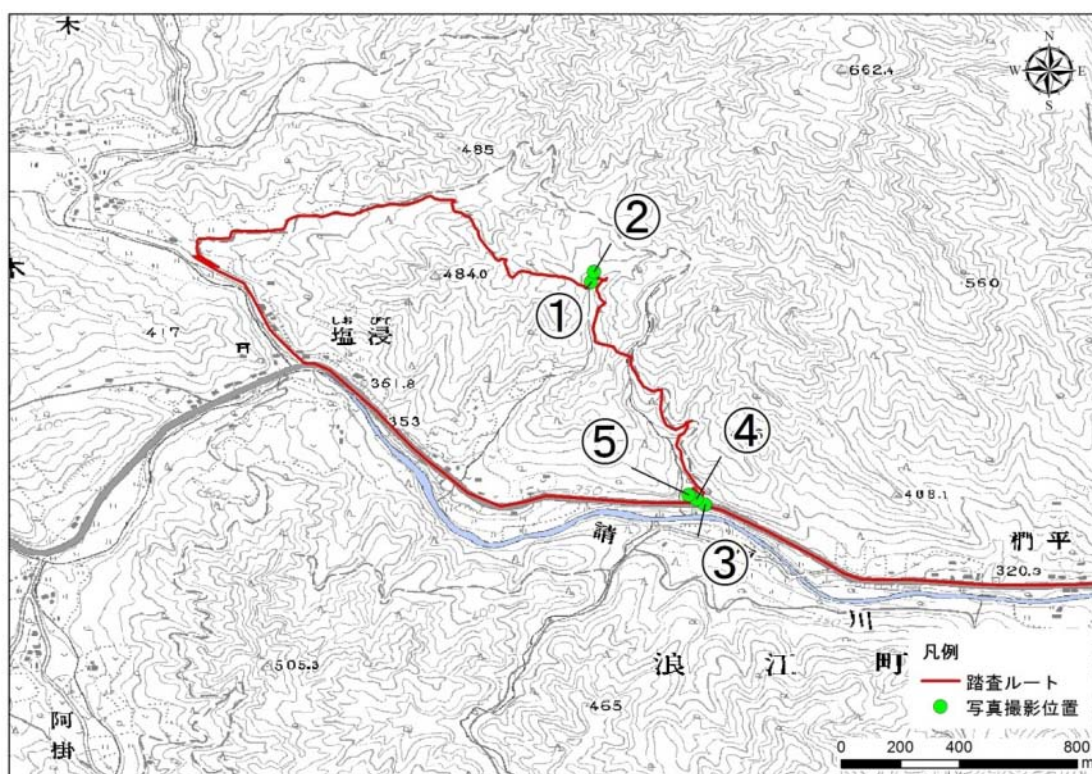
(12) 取扱	
------------	--

特定植物群落調査票
(追跡調査)

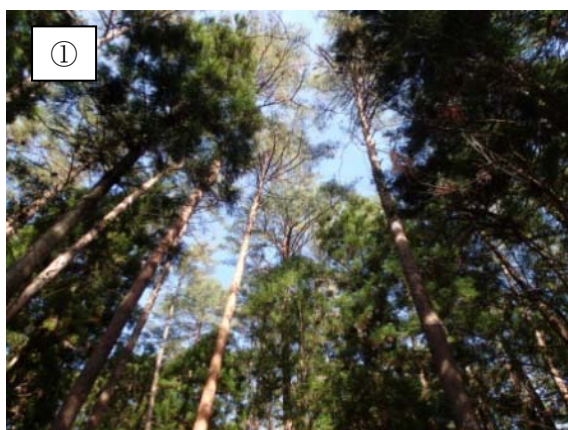
(1)調査年度	2015
(2)都道府県	福島県

(3) 対照番号	(4)地図 番号	(5)1/25,000地形図	(6) 件 名	(7)選定基準				
5	2	原町	塩浸(しおびて)のアカマツ林	E				
(8) 位 置		(9) 所在市町村	(10) 標高(m)	(11) 面積(ha)				
櫛平国有林地内		双葉郡 市 浪江町 町 村	420	3.4				
(13) 相観区分	冷温帯常緑針葉高木林		(14)立地区分	—				
(ア) 変 化 の 状 況 及 び 原 因	(1)	☒ 1 面積、群落構成とも著しい変化なし ☐ 2 面積に著しい変化あり (その面積 約 + ha) ☐ 3 群落構成に著しい変化あり ☐ 4 個体数(個体群選定の場合)に著しい変化あり ☐ 5 群落または個体群の消滅			(2)	原因 1 ☐ 人の立入 9 ☐ 植物の侵入 2 ☐ 盗採 10 ☐ 虫害・菌害 3 ☐ 農林業開発 11 ☐ 動物の侵入 4 ☐ 道路開発 12 ☐ 汚染物質の侵入 5 ☐ 観光開発 13 ☐ ゴミの投棄 6 ☐ 水辺の開発 14 ☐ 自然災害 7 ☐ その他の開発 15 ☐ その他 8 ☐ 周辺の開発		
	(3) 変化の具体的状況及び原因の具体的内容(上記(1)2～5に該当する場合に記入) 【第5回(1997年度)コメント】生育地は浪江町津島の櫛平国有林地内である。所管営林署に詳細の問い合わせと現地確認をしたところ位置・面積等に錯誤があったため訂正する(面積: +3.2ha)。 【今回コメント】帰還困難区域に指定され、立ち入りが制限されている為、林道は荒れており、アカマツの実生や空地雑草が繁茂していた。							
	(4) 存続・削除に関する意見		1 ☒ 特定植物群落として存続	2 ☐ 特定植物群落から削除				
	(イ) 保 護 の 現 状 及 び イ ン パ ク ト の 状 況	a 保 護 の 現 状	(1) 保護制度の種類・名称	材木遺伝資源保存林				
		(2) 指定状況	1 ☒ 継 続	2 ☐ 新 規	3 ☐ 変 更	4 ☐ 解 除		
		(3) 指定の年月(記入)		年 月	年 月	年 月		
(4) 旧指定名称(記入)				学術参考保護林				
b 群 落 に 対 する イ ン パ ク ト の 状 況	(5) インパクトの種類	0 ☐ 特になし 4 ☐ 道路開発 8 ☐ 周辺の開発 12 ☐ 汚染物質の侵入 1 ☐ 人の立入 5 ☐ 観光開発 9 ☐ 植物の侵入 13 ☐ ゴミの投棄 2 ☐ 盗採 6 ☐ 水辺の開発 10 ☐ 虫害・菌害 14 ☐ 自然災害 3 ☐ 農林業開発 7 ☐ その他の開発 11 ☐ 動物の侵入 15 ☐ その他	(6) 上記インパクトの具体的内容及び補足事項					
(ウ) 特 記 事 項	【第5回(1997年度)コメント】当地域の母樹林の様相もあり、林木遺伝資源保存林の林齢87年で枝下高が高い。林縁にはアカマツ幼木が群生している。林床にはヤマツツジがわい化して生育している。林業上高く評価されている津島松の典型林分で、阿武隈山地の代表的な植物景観となっている。 【今回コメント】 ・塩浸林道入口から林道を北上すると、斜面下部の比較的緩やかな立地に樹高25m、胸高直径40cm程度のアカマツがまとまって生育する林に到達した。過年度の調査票の記載と林の特徴が合致するため、特定植物群落であると判断した。 ・マツ枯れの影響と推定される変色または枯死した個体が散見された。 ・周辺部はスギまたは落葉広葉樹と混生するため、特定植物群落の範囲は国有林の林班図を参考にしたほうが良い(指定時の位置情報はポイント)。 ・塩浸林道のゲートがある東側寄りの林道は、西側に比べて林道の幅が広くアプローチしやすかった。							
(エ)調査方法	☒ 1 現地調査	2 ☐ 聞きとり調査(聞きとり先)	実施年月日		2015/11/16			
	☐ 3 文献調査(文献名、著者、発行年等)	4 ☒ その他(画像判読)						
調査者所属		アジア航測株式会社		調査者氏名	寺澤弘陽			

位置図



現地写真



【②一の宮のヒメコマツ林】

平成27年度東北地方太平洋沿岸地域植生・海域等調査業務

71-福6

県／緯度順ID	71
---------	----

平成25年度ID

津波影響調査票	—
植生調査票	—
現地写真	○
範囲の変更	—

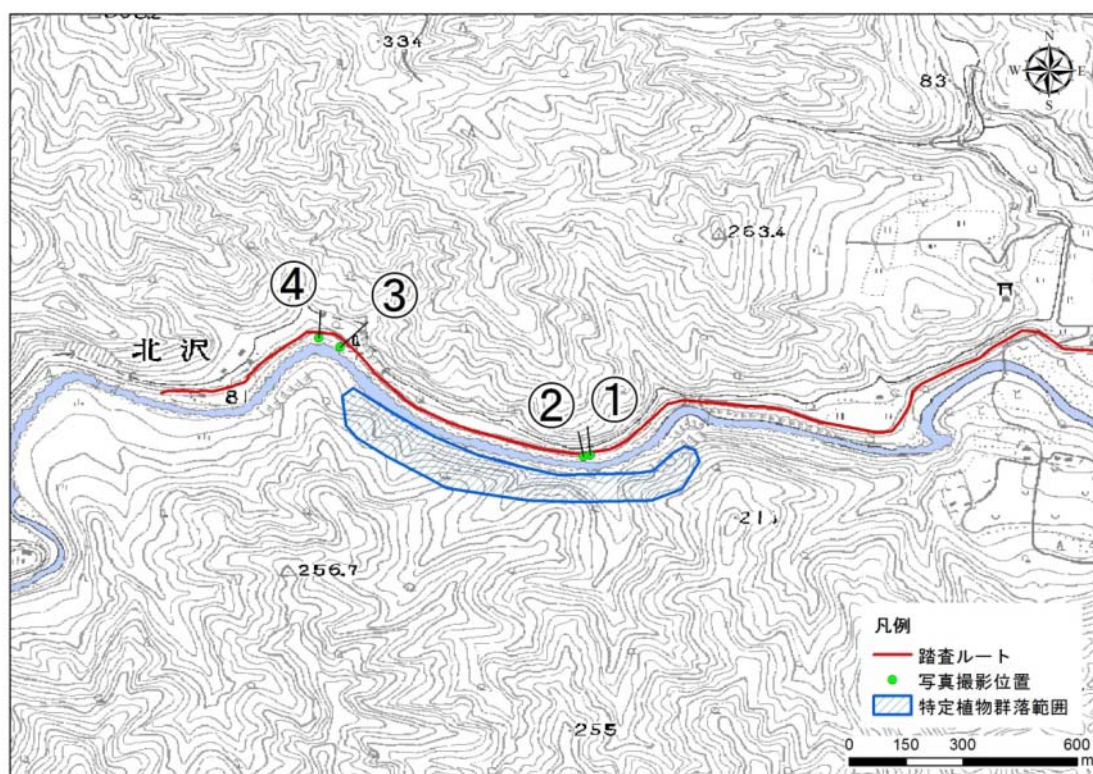
(12) 取扱	
------------	--

特定植物群落調査票
(追跡調査)

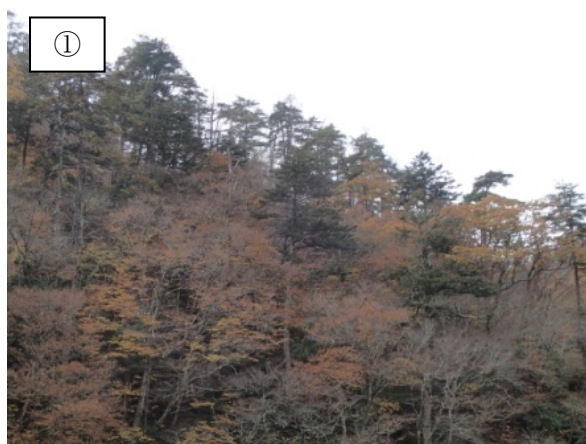
(1)調査年度	2015
(2)都道府県	福島県

(3) 対照番号	(4)地図 番号	(5)1/25,000地形図	(6)件 名	(7)選定基準													
6	3	浪江	一の宮のヒメコマツ林	C													
(8)位 置		(9)所在市町村		(10)標高(m)	(11)面積(ha)												
一の宮の佐々木俊一先生譜碑付近		双葉郡	市 郡 浪江町	町 村 120	9												
(13) 相観区分	暖温帯常緑針葉高木林		(14)立地区分	急崖地、岩壁													
(ア) 変 化 の 状 況 及 び 原 因	(1)	☒ 1 面積、群落構成とも著しい変化なし ☐ 2 面積に著しい変化あり (その面積 約 + ha) ☐ 3 群落構成に著しい変化あり ☐ 4 個体数(個体群選定の場合)に著しい変化あり ☐ 5 群落または個体群の消滅															
	(2)	原因 ☐ 1 人の立入 ☐ 9 植物の侵入 ☐ 2 盗採 ☐ 10 虫害・菌害 ☐ 3 農林業開発 ☐ 11 動物の侵入 ☐ 4 道路開発 ☐ 12 汚染物質の侵入 ☐ 5 観光開発 ☐ 13 ゴミの投棄 ☐ 6 水辺の開発 ☐ 14 自然災害 ☐ 7 その他の開発 ☐ 15 その他 ☐ 8 周辺の開発															
	(3) 変化の具体的状況及び原因の具体的内容(上記(1)2～5に該当する場合に記入) 【今回コメント】尾根の一部でアカマツまたはヒメコマツの枯死木や葉の黄変した個体あり。樹高は16～18m程度。																
	(4) 存続・削除に関する意見																
	1	☒ 特定植物群落として存続	2	☐ 特定植物群落から削除													
(イ) 保 護 の 現 状 及 び イ ン パ ク ト の 状 況	(1)	保護制度の種類・名称 阿武隈高原中部県立自然公園特別地域、土砂流出防備保安林															
	(2)	指定状況	1	☒ 継 続	2	☐ 新 規	3	☐ 変 更	4	☐ 解 除							
	(3)	指定の年月(記入)	年 月		年 月		年 月										
	(4)	旧指定名称(記入)															
	(5)	インパクトの種類	0 ☐ 特になし	4 ☐ 道路開発	8 ☐ 周辺の開発	12 ☐ 汚染物質の侵入	1 ☐ 人の立入	5 ☐ 観光開発	9 ☐ 植物の侵入	13 ☐ ゴミの投棄	2 ☐ 盗採	6 ☐ 水辺の開発	10 ☐ 虫害・菌害	14 ☐ 自然災害	3 ☐ 農林業開発	7 ☐ その他の開発	11 ☐ 動物の侵入
(ウ)	【第5回(1997年度)コメント】生育地は双葉郡浪江町一の宮から焼築の高瀬川の溪流付近である。ヒメコマツとアカマツの混交林をなしている。林床にはヒメコマツの若木、ヒサカキ、イワウチワ等が生育している。南方系のヒメコマツの分布は学術上貴重である。 【今回コメント】 ・県道253号線を内陸に向かうと、高瀬川を挟んだ対岸の斜面上部から下部にかけて、ヒメコマツ、アカマツが分布する急傾斜地が広がる。過去の空中写真を見る限り大きな変化は見られなかったものの、現地を確認したところ斜面上部付近のアカマツの一部が枯死している他、ヒメコマツの一部も黄色く変色していた。マツ枯れと推測されるが、詳しい原因は不明である。 ・北側の斜面にもヒメコマツが分布していることから、範囲の見直しの際は選定理由を整理するとともに、群落の広がりに留意する必要がある。 ・道路沿いに高瀬川渓谷の看板と休憩所、比較的大きな駐車場が整備されており、位置の特定は容易である。																
(エ)調査方法	☒ 1	現地調査	2	☐ 聞きとり調査 (聞きとり先)	実施年月日		2015/11/17										
	☐ 3	文献調査(文献名、著者、発行年等)	4	☒ その他(画像判読)													
調査者所属		アジア航測株式会社				調査者氏名		寺澤弘陽									

位置図



現地写真



【③焼築のケヤキ林】

72-福 7

県／緯度順ID	72
平成25年度ID	

津波影響調査票	—
植生調査票	—
現地写真	○
範囲の変更	—

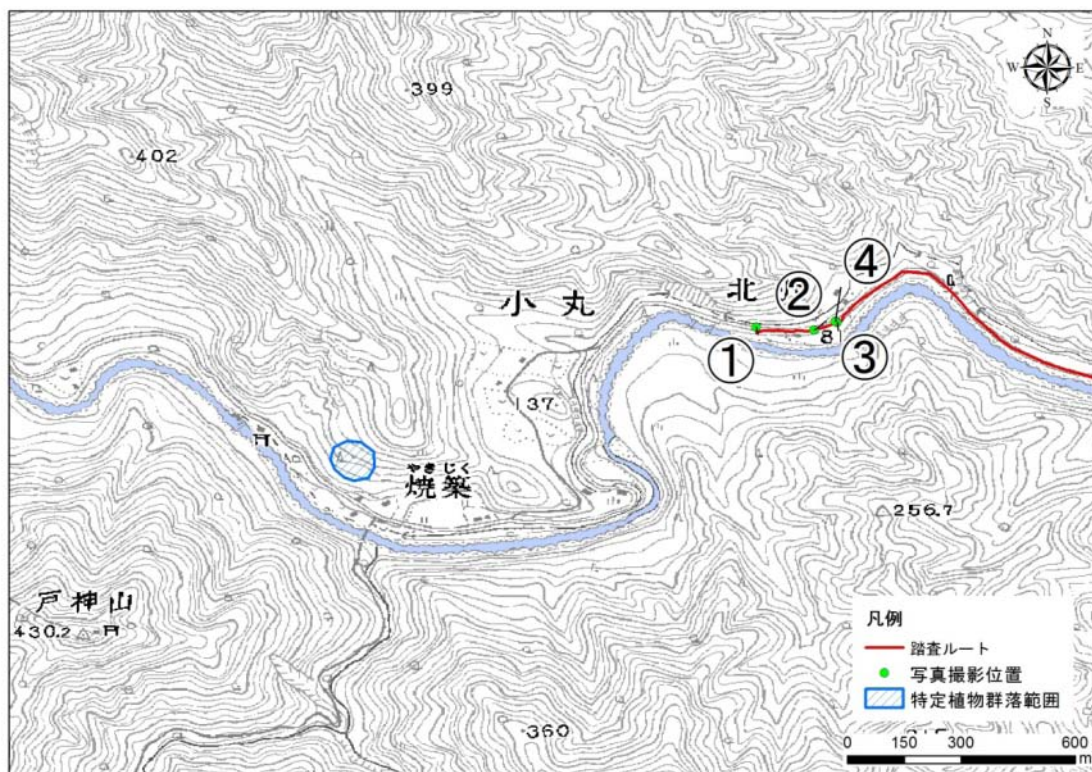
(12) 取扱		特定植物群落調査票 (追跡調査)	(1)調査年度	2013
			(2)都道府県	福島県

(3) 対照番号	(4)地図番号	(5)1/25,000地形図	(6) 件 名	(7)選定基準		
7	3	浪江	焼築(やけじく)のケヤキ林	H		
(8) 位 置		(9) 所在市町村	(10) 標高(m)	(11) 面積(ha)		
浪江営林署焼築事業所付近		双葉郡 市 浪江町 町 村	120	0.3		
(13) 相観区分	暖温帯夏緑広葉高木林		(14)立地区分	岩礫地		
(ア) 変化の状況及び原因	(1) 変 化 状 況	☒ 1 面積、群落構成とも著しい変化なし	(2) 原 因	1 ☐ 人の立入	9 ☐ 植物の侵入	
		☐ 2 面積に著しい変化あり (その面積 約 + ha)		2 ☐ 盗採	10 ☐ 虫害・菌害	
		☐ 3 群落構成に著しい変化あり		3 ☐ 農林業開発	11 ☐ 動物の侵入	
		☐ 4 個体数(個体群選定の場合)に著しい変化あり		4 ☐ 道路開発	12 ☐ 汚染物質の侵入	
		☐ 5 群落または個体群の消滅		5 ☐ 観光開発	13 ☐ ゴミの投棄	
	(3) 変化の具体的な状況及び原因の具体的な内容(上記(1)2～5に該当する場合に記入)					
(4) 存続・削除に関する意見		1 ☒ 特定植物群落として存続	2 ☐ 特定植物群落から削除			
(イ) 保護の現状及びインパクトの状況	a 保護の現状	(1) 保護制度の種類・名称	阿武隈高原中部県立自然公園特別地域、土砂流出防備保安林			
		(2) 指定状況	1 ☒ 継 続	2 ☐ 新 規	3 ☐ 変 更	4 ☐ 解 除
		(3) 指定の年月(記入)	年 月		年 月	
		(4) 旧指定名称(記入)	年 月		年 月	
	b インパクトの状況	(5) インパクトの種類	0 ☐ 特になし	4 ☐ 道路開発	8 ☐ 周辺の開発	12 ☐ 汚染物質の侵入
		(6) 上記インパクトの具体的な内容及び補足事項				
(ウ) 特記事項	【第5回(1997年度)コメント】生育地は県道沿いで、主要なケヤキ等の樹木には樹種名の表示板が取り付けられている。大きな礫があり水はけも良いようである。林床にはヤマブキ、チヂミザサ、タマアジサイなどが生育しており、実生由来のケヤキ稚樹の群生もみられる。					
	【今回コメント】現地調査時(2015年11月17日)は県道253号線の小丸の手前で、私有地および立入禁止のゲートが複数あり、焼築の集落へたどり着くことができなかった。平成25年度調査では、J-IMAGE50(2011年5月15日撮影)および1970年代オルソ画像等を判読した結果、特に人為的な改変はみられなかった。ただし、群落範囲については、現地調査を実施したうえで、選定範囲の見直しが行うことが望ましい。					
(エ)調査方法	☒ 1 現地調査	2 ☐ 聞きとり調査(聞きとり先)	実施年月日		2015/11/17	
	☐ 3 文献調査(文献名、著者、発行年等)	4 ☒ その他(画像判読)				
調査者所属	アジア航測株式会社		調査者氏名	寺澤弘陽		

【③焼築の宮のケヤキ林】

位置図

72-福7



現地写真

